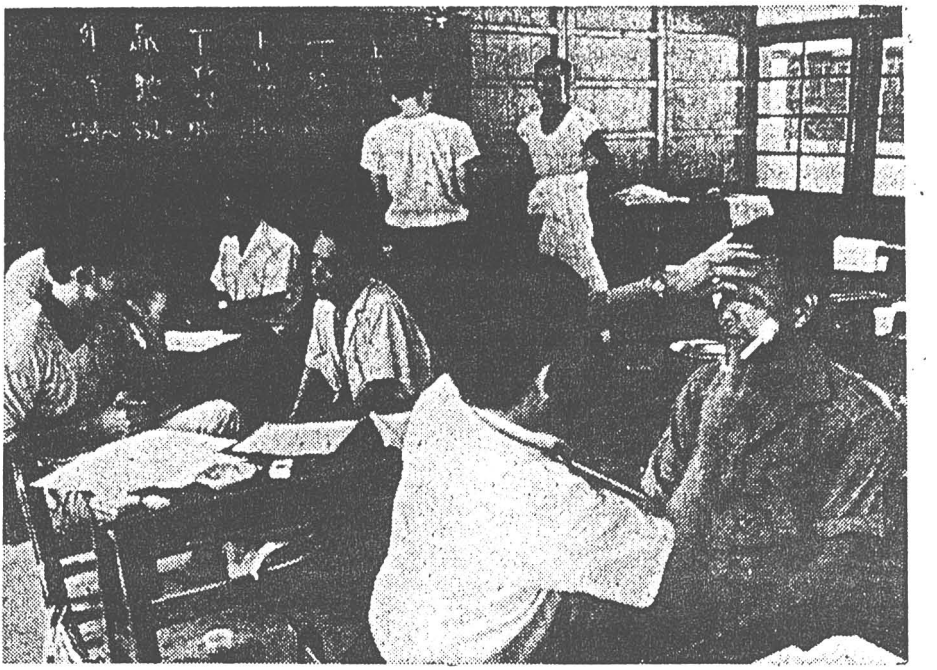
熊日1971.08.22



スタートした御所浦町嵐口地区の住民検診

隠れ水俣病にメス

まず対岸の天草

御所浦町嵐口地区 住民検診はじまる

「潜在水俣病患者」などの発掘をねらいとする熊大第二次水俣病研究班（代表武内忠男第二病理学教授）の天草郡御所浦町嵐口地区における住民検診が、二十一日からスタートした。有機水銀中毒がはたして対岸の天草まで及んでいたかどうかが、初めて明らかにされるわけで、検診結果によっては、水俣病問題はさらに新しい局面を迎えることになる。

同研究班は今回の疫学調査（モデル地区調査）を前に、すでに同地区で、アンケートによる予備調査を実施している。同日は熊大公衆衛生学教室の野村茂教授をはじめ小児科、神経精神科などから二十七人のスタッフが参加、嵐口小で午前七時から診察を始めた。調査対象は同地区五百七世帯の千九百七十八人全員。事前のPRが行き届いていたためか住民の出足は好調で、正午過ぎまでに受診者は百人を越えた。一般内科検診のほか尿、血液検査、聴覚、運動感覚、神経・筋肉の協調機能テスト、知覚、発言、反射などに関する感覚的心理的検査、聴力、平衡感覚、握力検査などが綿密に行なわれた。

実質的な"隠れ水俣病発掘"と

いうことで、研究班はアンケート調査の段階から、住民に不必要なショックを与えないよう細心の注意を払ってきたが、初日の検診でみる限り住民側は思ったほど〝水俣病〟を気にしていない感じ。子供連れで訪れた主婦(四)は「かつてこの付近でも毛髪水銀量調査が行なわれたことも知っているし、水俣病検査といわれても、どういうことはありません。私たちの知っている限りでは、水俣病患者といわれるような人は知りません」といい、また初老の漁師は「仲間には神経痛、ギックリ腰など多いことだし、ちょうどいい機会だ。からだ全部をみてもらおうと話すものもいる。なにしろ健康診断なんて、ふだんは縁のないところですからねえ」と研究班の親身の検査にすっかり感心したようす。

検診は二十二日までが小学生三年以下と乳幼児および付き添いの保護者、二十三日から二十八日までが成人のみ、二十九日は外平地区へ移動し、小学生以上の検診を実施して御所浦島を終わり、このあと九月二日から水俣市湯堂、月の浦、出月三地区の検診に入る。

なお同町は御所浦、牧島、横浦島など大小十八の島からなり、人口は約六千六百人。島民の六割が漁業で、魚介類がおもな副食。三十五年—三十七年当時、県衛研の毛髪水銀量調査では最高九二〇PPMをはじめ、要注意とされた五〇PPM以上が一八・五%もいた。

野村教授の話　町当局や住民の理解でアンケート調査も百%近い回収率だったし、検診もますますスムーズに進んで、喜んでいる。健康管理上プラスになることなので、期間中できるだけ多くの住民が受診してほしい。私たちの調査は、あくまでも臨床的検診に入る前の〝前座〟の役目だが、住民一人々々の健康低下の理由を一つ一つつぶして行き、専門的調査への足がかりを得たい。今の段階で、水俣病問題について見解を述べるのは早計だろう。